

青森ねぶた運行団体と子ども・学校との関わりの実際

～大型・子ども・地域ねぶた運行団体を対象とした調査～

The Current Situation of the Relationship between Aomori 'Nebuta' Festival Organizers and School Children and Schools : Survey Results Collected from the Organizers of Full-Scale, Children's, and Regional 'Nebuta' Floats

立田 健太* ・ 大谷 良光** ・ 大野 絵美***
Kenta TATSUTA ・ Yoshimitsu OTANI ・ Emi ONO

論文要旨 青森ねぶた運行団体と子ども・学校教育との関わり、意識を明らかにする目的で、100 運行団体に質問紙調査を依頼し、71 団体（回収率 71 %）より回答を得た。ねぶた祭の、囃子、ハネトに参加する子どもは、学年があがるに従い減少し、一部の大型ねぶたを除き子どもの参加は相対的に少なかった。各団体における子どもの囃子への参加は、増える傾向、一方ハネトへの参加は減少傾向で、全体としてハネト離れがみられた。ねぶた団体の学校への関わりは、現在何らかの関わりを持っている団体は 3 割、学校からの要望があれば対応できる団体は 6 割であった。学校が祭を取り上げることに意義あると考えている団体は 10 割、学校と協力する必要性を意識している団体が 8 割であった。これらの結果から「提言」をまとめ関係者に届けた。

キーワード：青森ねぶた、ねぶた運行団体、ねぶた子ども参加状況調査、学校教育、地域の伝統文化

1. はじめに

本調査は、「ねぶた・ねぶたと学校教育との関わり」研究の一環で、学校が地域と連携し「地域の伝統文化」を教育課程に生かす基礎資料を得るため、ねぶた祭運行団体が子ども（18歳未満）と学校教育にどのように関わっているかを明らかにすることを目的として実施した¹⁾。そして、終局の目的として津軽の子どもたちの人格形成の一端に寄与し、「ねぶた・ねぶた」の普及に貢献できること願っている。

2. 調査方法

青森市におけるねぶた運行団体を次の 3 つに区分して調査・整理した。8 月 2～7 日の青森ねぶた祭に参加している団体を「大型ねぶた（2008 年は 23 団体）」、8 月 2、3 日に大型ねぶたと一緒に運行し、また地域においても運行する団体を「子どもねぶた（2008 年は 17 団体）」、7 月下旬または 8 月中旬に地域・町内を運行する団体を「地域ねぶた（2008 年で 60 団体）」とす

る。

そこで本調査は、大型ねぶた・地域ねぶた・子どもねぶたに参加している団体を対象に、2008 年 11 月下旬から 12 月上旬に実施した。調査用紙の配付は、青森観光コンベンション協会のご協力により行い、100 団体中、回収数は 71 団体、回収率は 71.0%であった。また、その内訳は表 1 のようである。

	団体数	回収数	回収率
大型ねぶた	23	17	73.9%
子どもねぶた	17	14	82.4%
地域ねぶた	60	40	66.7%
合計	100	71	71.0%

表 1 運行団体区分別調査用紙回収数と回収率

運行団体の母体は、表 2 である。その他には、職員互助会、消防団、愛好会、PTA、幼稚園、保育園、学校、こども会、児童館、生協、有志、育成会等であった。

	町内		学区		市民団体		企業		同業組合		官公庁		その他	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%
大型ねぶた運行に参加	4	12.5%	1	3.1%	1	3.1%	12	37.5%	2	6.3%	1	3.1%	11	34.4%
地域ねぶた運行のみ	31	60.8%	5	9.8%	1	2.0%	1	2.0%	0	0.0%	0	0.0%	13	25.5%

表 2 運行団体の母体（*複数回答あり）

調査内容は、「Ⅰ.運行団体とねぶた祭への児童・生徒の参加状況について」、「Ⅱ.ねぶたと学校との関わりについて」、「Ⅲ.学校と地域との連携に対する意識について」と「祭や学校・関係団体に対する意見・要望についての自由記述」で構成されている。

3. 調査結果と考察

I. ねぶたへの子どもの参加状況について

(1) 囃子への子どもの参加状況

①囃子に参加した子どもの1団体あたりの人数

	幼	小	中	高	合計
全体	5.49	24.85	8.66	2.34	41.34
大型	6.35	18.24	7.24	5.65	37.47
子ども	6.00	25.38	4.08	4.08	42.38
地域	4.92	27.63	9.89	0.26	42.71

表3-1 囃子に参加した子どもの1団体平均人数

表3-1は、大型ねぶたで囃子参加者1200名と回答した1団体(表3-2の大型100人以上)を除いた16団体と、子どもねぶた、地域ねぶたへの子どもの平均参加人数である。大型ねぶたは、1団体を除けば囃子に参加している子どもは、相対的に多くない。また、囃子の主流は小学生で、地域ねぶたでの高校生の参加が極めて低いことが指摘できる

囃子	1~10		11~30		31~50		51~99		100以上		計		
	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	
全体	幼	19	13.0%	6	4.1%	2	1.4%	0	0.0%	0	0.0%	27	18.5%
	小	19	13.0%	30	20.5%	5	3.4%	1	0.7%	4	2.7%	59	41.1%
	中	37	25.3%	4	2.7%	2	1.4%	0	0.0%	1	0.7%	44	9.6%
	高	15	10.3%	1	0.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	16	11.6%
計	90	61.6%	41	28.1%	9	6.2%	1	0.7%	5	3.4%			
大型	幼	9	19.1%	2	4.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	11	23.4%
	小	6	12.8%	7	14.9%	2	4.3%	0	0.0%	1	2.1%	16	34.0%
	中	11	23.4%	1	2.1%	1	2.1%	0	0.0%	0	0.0%	13	27.7%
	高	6	12.8%	1	2.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	7	14.9%
計	32	68.1%	11	23.4%	3	6.4%	0	0.0%	1	2.1%			
子ども	幼	4	12.5%	2	6.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	6	18.8%
	小	1	3.1%	9	28.1%	2	6.3%	0	0.0%	0	0.0%	12	37.5%
	中	6	18.8%	2	6.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	8	25.0%
	高	6	18.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	6	18.8%
計	17	53.1%	13	40.6%	2	6.3%	0	0.0%	0	0.0%			
地域	幼	6	9.0%	2	3.0%	2	3.0%	0	0.0%	0	0.0%	10	14.9%
	小	12	17.9%	14	20.9%	1	1.5%	1	1.5%	3	4.5%	31	43.3%
	中	20	29.9%	1	1.5%	1	1.5%	0	0.0%	1	1.5%	23	34.3%
	高	3	4.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	3	4.5%
計	41	61.2%	17	25.4%	4	6.0%	1	1.5%	4	6.0%			

表3-2

囃子に参加していた子ども人数の学校種別・人数段階比較表

表3-2は、囃子に参加した子ども人数の学校種別・人数段階別表である。各団体への子どもの参加は、各学校種30人以下分布に集中し、それは9割以上を占めている。これは、囃子として参加している子どもの人数が相対的に多くないといえる。この傾向は大型ねぶたでも同じであり、囃子の質を高め、入賞を狙うため「子どもの参加に制限をかけている」という関係者の指摘もある。大型ねぶたは、一部の団体を除き、大人中心の囃子に子どもたちが参加している様相である。一方、子どもねぶた、地域ねぶたは、小学生を中心に子どもの参加を促し、囃子の主役になっていると思われる。

②囃子に参加する子どもの人数の変化

囃子に参加する人数の変化は表4で、全体で見ると「増えつつある」が33.8%「変化は大きくない」が39.4%、「減りつつある」が16.9%、その他が7.0%であり、その内容は「他団体が賞取りになっており、子ども達を締め出しているため増えすぎている」「発足して間もないためわからない」「全校生徒での取り組みで人数調整をしている」、などであった。

子どもねぶたでは「増えつつある」が57.1%、「減りつつある」が7.1%で、増減の差し引きをすれば5割の団体が「増えつつある」傾向といえる。また、大型ねぶたと地域ねぶたでは、「増えつつある」と「減りつつある」の増減の差し引き差は、大型ねぶた6%、地域ねぶた10%で、全体的傾向として、「増えつつある」と特徴付けられる。

	増えつつある		変化は大きくない		減りつつある		その他		無回答	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	24	33.8%	28	39.4%	12	16.9%	5	7.0%	2	2.8%
大型	4	23.5%	9	52.9%	3	17.6%	1	5.9%	0	0.0%
子ども	8	57.1%	4	28.6%	1	7.1%	1	7.1%	0	0.0%
地域	12	30.0%	15	37.5%	8	20.0%	3	7.5%	2	5.0%

表4 囃子に参加する子どもの人数の変化

③囃子に子どもの参加が増えつつあると思われる要因

囃子に参加する子どもの人数が増えつつあると思われる要因を選択した団体の割合は表5で、第一に「興味・関心を持つ生徒が増えた」が79.2%、第二に「団体の活動の活発化」と「団体の働きかけ」が共に37.5%、第三に「保護者の働きかけ」と「学校の働きかけ」が共に20.8%、その他が4.2%である。その他の内容としては、練習会参加者からの口コミがあげられてい

た。

増減の差し引きで約5割の団体が「増えつつある」子どもねぶたは、「団体の働きかけ」(5割)や「団体

活動の活発化」(4割)の努力の結果、「興味・関心を持つ生徒が増えた」(10割)とすることに注視する必要がある。

	興味・関心を持つ生徒が増えた		団体の活動の活発化		団体の働きかけ		保護者の働きかけ		学校の働きかけ		その他	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	19	79.2%	9	37.5%	9	37.5%	5	20.8%	5	20.8%	1	4.2%
大型	1	25.0%	0	0.0%	2	50.0%	1	25.0%	2	50.0%	0	0.0%
子ども	8	100.0%	3	37.5%	4	50.0%	2	25.0%	0	0.0%	1	12.5%
地域	10	83.3%	6	50.0%	3	25.0%	2	16.7%	3	25.0%	0	0.0%

表5 囃子の人数が増えつつある要因(複数回答あり。割合の母数は団体数)

④囃子に子どもの参加が減りつつあると思われる要因

囃子に参加する子どもの人数が減りつつあると思われる要因を選択した団体の割合は表6で、第一に「意欲の低下」と「保護者の働きかけの減少」が共に58.3%、第二に「部活動の影響」が33.3%、第三に「子どもの数に制限をかけているため」が25.0%、第四に「学校が関わらなくなった」8.3%であり、その他

は25.0%で、その内容は、少子化、親子の数の減少と高齢化、である。

約2割が「減りつつある」と回答した大型ねぶたと地域ねぶたは、前者が「子どもの数に制限をかけているため」と「意欲の低下」、また後者は「保護者の働きかけの減少」が最も多くを理由していることは、特筆すべきである。

	ハネトに参加		部活動の影響		意欲の低下		保護者の働きかけの減少		学校が関わらなくなった		子どもの数の制限をかけている		その他	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	0	0.0%	4	33.3%	7	58.3%	7	58.3%	1	8.3%	3	25.0%	3	25.0%
大型	0	0.0%	1	33.3%	2	66.7%	1	33.3%	0	0.0%	2	66.7%	1	33.0%
子ども	0	0.0%	1	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	100.0%	0	0.0%
地域	0	0.0%	2	25.0%	5	62.5%	6	75.0%	1	12.5%	0	0.0%	2	25.0%

表6 囃子の人数が減りつつある要因(複数回答あり。割合の母数は団体数)

(2) ハネトへの子どもの参加状況

①ハネトに参加した子どもの1団体平均参加人数

表7-1の大型ねぶたは、100以上と答えた1団体(表7-2大型)と、参加者が多いため把握できず不明等という4団体を除く12団体の平均参加人数である。ハネトとしての参加数は、当然大型ねぶたが多く、また、囃子の参加数と比べると、1団体平均参加人数が、全体で20名、大型ねぶたで50名ほど多かった。

ねぶたでも同じ傾向であり、子どもの参加が極めて少ない。また、1団体は、子ども参加0であり、囃子の質を高め、入賞を狙うため「子どもの参加に制限をかけている」という団体もあった。

	幼	小	中	高	合計
全体	24.96	22.67	9.45	5.47	62.56
大型	18.33	19.17	25.00	24.17	86.67
子ども	49.33	25.25	1.83	0.83	77.25
地域	18.10	23.03	6.39	0.03	47.55

表7-1 ハネトに参加した子どもの1団体の平均人数

表7-2は、ハネトに参加していた子ども人数の学校種別・人数段階別表である。

各団体とも子どもハネトの主流は幼稚園生と小学生であり、学年があがるにつれて減少している。特に、高校生の占める比率が大型ねぶたを除き激減し、地域

ハネト		1~10		11~30		31~50		51~99		100以上		計	
		団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	幼	24	18.6%	16	12.4%	2	1.6%	1	0.8%	4	3.1%	47	36.4%
	小	11	8.5%	33	25.6%	5	3.9%	0	0.0%	1	0.8%	50	38.8%
	中	21	16.3%	4	3.1%	1	0.8%	0	0.0%	1	0.8%	27	20.9%
	高	2	1.6%	0	0.0%	2	1.6%	0	0.0%	1	0.8%	5	3.9%
	計	58	45.0%	53	41.1%	10	7.8%	1	0.8%	7	5.4%	129	
大型	幼	5	16.7%	1	3.3%	1	3.3%	0	0.0%	1	3.3%	8	26.7%
	小	3	10.0%	8	26.7%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.3%	12	40.0%
	中	3	10.0%	2	6.7%	1	3.3%	0	0.0%	1	3.3%	7	23.3%
	高	0	0.0%	0	0.0%	2	6.7%	0	0.0%	1	3.3%	3	10.0%
	計	11	36.7%	11	36.7%	4	13.3%	0	0.0%	4	13.3%	30	
子ども	幼	3	11.5%	6	23.1%	0	0.0%	0	0.0%	2	7.7%	11	42.3%
	小	1	3.8%	8	30.8%	2	7.7%	0	0.0%	0	0.0%	11	42.3%
	中	3	11.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	3	11.5%
	高	1	3.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.8%
	計	8	30.8%	14	53.8%	2	7.7%	0	0.0%	2	7.7%	26	
地域	幼	16	21.9%	9	12.3%	1	1.4%	1	1.4%	1	1.4%	28	38.4%
	小	7	9.6%	17	23.3%	3	4.1%	0	0.0%	0	0.0%	27	37.0%
	中	15	20.5%	2	2.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	17	23.3%
	高	1	1.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.4%
	計	39	53.4%	28	38.4%	4	5.5%	1	1.4%	1	1.4%	73	

表7-2 ハネトに参加していた子ども人数の学校種別・人数段階比較表

② ネットに参加する子どもの数変化

ネットに参加する子どもの数変化は、全体みると「増えつつある」が5.6%、「変化は大きくない」が50.7%、「減りつつある」が29.6%であり、大型ねぶた、子どもねぶた、地域ねぶた、それぞれでも「変化は大きくない」が番多、次で「減りつつある」となっている。囃子と轟、減りつつある傾向が

	増えつつある		変化は大きくない		減りつつある		その他		無回答	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	4	5.6%	36	50.7%	21	29.6%	1	1.4%	9	12.7%
大型	1	5.9%	10	58.8%	4	23.5%	1	5.9%	1	5.9%
子ども	2	14.3%	8	57.1%	3	21.4%	0	0.0%	1	7.1%
地域	1	2.5%	18	45.0%	14	35.0%	0	0.0%	7	17.5%

表8 ネットに参加する子どもの数変化

特徴的といえる。無回答が多くなっているのは、地域

ねぶたにおいてハネトが行われていないところがあるからと推測される。

③ ハネトに参加する子どもが増えつつあると思われる要因

ハネトに参加する子どもの人数が増えつつあると思われる要因を選択した団体の割合は、第一に「団体の活動の活発化」、第二に、「興味・関心を持つ生徒が増えた」「保護者の働きかけ」「学校の働きかけ」となっている。その他の内容としては、「障害者への解放などの活動が受け入れられているのではないか」、「活動をしているわけではないが学校から呼びかけてもらったため」、が挙げられていた。

	興味・関心を持つ生徒が増えた		団体の活動の活発化		団体の働きかけ		保護者の働きかけ		学校の働きかけ		その他	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	1	25.0%	3	75.0%	0	0.0%	1	25.0%	1	25.0%	2	50.0%
大型	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	100.0%	1	100.0%
子ども	1	50.0%	2	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	50.0%
地域	0	0.0%	1	100.0%	0	0.0%	1	100.0%	0	0.0%	0	0.0%

表9 ハネトの人数が増えつつある要因(複数回答あり。割合の母数は団体数)

④ ハネトに参加する子どもが減りつつあると思われる要因

ハネトに参加する子どもの人数が減りつつあると思われる要因を選択した団体の割合、第一に「保護者の働きかけの減少」が42.9%で、特に子ども団体は100%、地域団体も42.9%ともっとも多い。第二に「囃子

に参加」と「意欲の低下」が共に38.1%、第三に「部活動の影響」が28.6%、第四に「学校が関わらなくなった」が4.8%となっている。その他は28.6%で、その内容は「企業専用の浴衣と花笠を着用しなければならない」「先生達がやる気がないため」「少子化のため」等であった。

	囃子に参加		部活動の影響		意欲の低下		保護者の働きかけの減少		学校が関わらなくなった		子どもの数の制限をかけている		その他	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	8	38.1%	6	28.6%	8	38.1%	9	42.9%	1	4.8%	0	0.0%	6	28.6%
大型	2	50.0%	3	75.0%	1	25.0%	0	0.0%	1	25.0%	0	0.0%	3	75.0%
子ども	1	33.3%	0	0.0%	2	66.7%	3	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
地域	5	35.7%	3	21.4%	5	35.7%	6	42.9%	0	0.0%	0	0.0%	3	21.4%

表10 ハネトの人数が減りつつある要因(複数回答あり。割合の母数は団体数)

II. 運行団体と学校との関わりについて

(1) 学校での子どもへの指導・支援

① 学校への指導・支援をしているねぶた団体数

学校に出向いて子どもへの指導・支援をしているねぶた団体は、全体で32.4%であり、特に大型ねぶたでは52.9%、子どもねぶたで50.0%と半数を超える団体関わっているが、一方地域ねぶた団体は17.5%と少ないことが特徴的である。

1	特にしていない		支援している		無回答	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	45	63.4%	23	32.4%	3	4.2%
大型	8	47.1%	9	52.9%	0	0.0%
子ども	7	50.0%	7	50.0%	0	0.0%
地域	30	75.0%	7	17.5%	3	7.5%

表11-1 学校への指導・支援団体数

② 学校での指導・支援の内容

ねぶた団体による学校での指導・支援内容は、「囃

子」が全体で 16 団体 69.6 %、「ねぶた製作」が 6 団体で 26.1 %、「講話」が 2 団体で 8.7 %であった。その他と回答したのは 5 団体 13.0 %であり、その内容は「区域内の小学校の紹介」「予算の支援」「体育館を借りて年間を通した囃子の練習」「年 1 回の交流」であった。「囃子」の指導・支援は、大型ねぶたで 77.8%の団体が行っており、地域ねぶたでも 85.7%の団体が指導・支援しており、運行団体が練習の必要な「囃子」の担い手の養成のために努力しているのではないかとと思われる。

1	ねぶた製作		囃子		講話		その他	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	6	26.1%	16	69.6%	2	8.7%	3	13.0%
大型	2	22.2%	7	77.8%	0	0.0%	1	11.1%
子ども	2	28.6%	3	42.9%	2	28.6%	2	28.6%
地域	2	28.6%	6	85.7%	0	0.0%	0	0.0%

表 11-2 学校での子どもたちへの指導・支援内容
(複数回答あり・分母は支援団体数)

③ねぶた製作・制作の指導・支援内容

ねぶた製作・制作の支援を行っている団体は全部で 6 団体であり、そのうち 66.7 %の 4 団体がねぶた本体の製作を行っている。その内訳は、大型 1 団体、子ども 1 団体、地域 2 団体である。金魚ねぶたの制作は、それぞれ 1 団体ずつの計 3 団体が行っており、灯籠ねぶたの制作は、大型 1 団体、地域 1 団体の計 2 団体である。ねぶたの面の制作は、地域ねぶたが 1 団体だけ

	起源・歴史		ねぶた製作		参加する際の指導		囃子について		ねぶた本体について		ねぶた師について	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	2	100.0%	2	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
大型	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
子ども	2	100.0%	2	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
地域	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

表 14 講話の内容

(2) 学校から指導・支援の要望があった場合の対応と指導・支援の内容

①学校から指導・支援の要請があった場合の対応

「学校からねぶたに関しての指導・支援の要請があった場合対応できるか」は、全体で 59.2%が前向きに考え、特に大型ねぶたは 82.4%、子どもねぶたは 78.6%の団体が「関われる」としていた。一方、地域ねぶた団体は、42.5 %の団体が「難しい」と答え、人的・組織的に団体としての運営が大変である様相が推測される。しかし、団体としての組織的力が小さな地域ねぶた団体でも半数を超える団体が、学校でのねぶた指

行っていた。その他では、丸や四角などをベースとした簡単な型のねぶた制作などが挙げられていた。

	ねぶたの面		金魚ねぶた		灯籠ねぶた		ねぶた本体		その他	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	1	16.7%	3	50.0%	2	33.3%	4	66.7%	2	33.3%
大型	0	0.0%	1	50.0%	1	50.0%	1	50.0%	1	50.0%
子ども	0	0.0%	1	50.0%	0	0.0%	1	50.0%	1	50.0%
地域	1	50.0%	1	50.0%	1	50.0%	2	100.0%	0	0.0%

表 12 ねぶた製作・制作における支援内容(複数回答あり)

④囃子の指導・支援内容

囃子の指導・支援を行っている団体は、全体で 16 団体であり、ほぼすべての団体で「太鼓」「笛」「手振り鉦」3つの指導が行われていた。

	太鼓		笛		手振り鉦	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	15	93.8%	14	87.5%	14	87.5%
大型	6	85.7%	6	85.7%	6	85.7%
子ども	3	100.0%	2	66.7%	2	66.7%
地域	6	100.0%	6	100.0%	6	100.0%

表 13 囃子における支援内容(複数回答あり)

⑤講話の指導内容

講話を行っている団体は全体で 2 団体であるが、どちらも子どもねぶた運行団体である。そして、講話の内容も「ねぶたの起源・歴史」と「ねぶた製作」についてであり、「参加する際の指導」「囃子について」「ねぶた本体について」「ねぶた師について」の講話はどの団体でも為されていなかった。

導・支援に関わろうと考えていることは心強い。その他は、「出来るだけ対応したいが内容による」「指導はできないが協力ならできる」というものであった。

現在、学校でのねぶたに関する教育に関わっている団体が、全体で 32.4 %、大型ねぶたで 52.9%、子どもねぶたで 50.0%、地域ねぶたで 17.5%で(表 11-1 参照)、今後参加可能な団体は、全体で 26.8%、以下 29.5%、29.6%、25.5%と約 3 割弱が見込まれることになる。特に地域ねぶたの地域から、そして、各学校区からの参加は、学校基盤と同一であるため進展が望めるといえよう。

	難しい		支援できる		無回答	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	23	32.4%	42	59.2%	6	8.5%
大型	3	17.6%	14	82.4%	0	0.0%
子ども	3	21.4%	11	78.6%	0	0.0%
地域	17	42.5%	17	42.5%	6	15.0%

表 15-1 学校から要請のあった場合の対応

②学校での指導・支援で実施できる内容

学校で指導・支援できる内容は、「囃子」が全体で 33 団体 78.6 % と一番多く、次いで「ねぶた製作・制作」が 17 団体で 40.5 %、「講話」が 9 団体で 21.4 % であった。

	ねぶた製作		囃子		講話		その他	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	17	40.5%	33	78.6%	9	21.4%	2	4.8%
大型	3	21.4%	13	92.9%	2	14.3%	1	7.1%
子ども	7	63.6%	8	72.7%	4	36.4%	0	0.0%
地域	7	41.2%	12	70.6%	3	17.6%	1	5.9%

表 15-2 要望があった場合実施できる指導・支援内容
(複数回答あり・分母は支援団体数)

③ねぶた製作・制作の指導・支援内容

ねぶたの製作・制作に関わることができるとする団体は、全体で 17 団体あり、「金魚ねぶたの制作」と「ねぶた本体の製作」は 17 団体中 13 団体が行えるとしている。それぞれの内訳は「金魚ねぶたの製作」は、大型 2 団体、子ども 6 団体、地域 5 団体、「ねぶた本体の製作」は、大型 1 団体、子ども 5 団体、地域 7 団体である。「ねぶたの面の製作」と「灯籠ねぶたの製作」は共に 4 団体で 23.5 % であった。その他も 4 団体あり、その内容は、支援の内容にもよるが主に助成金、

	起源・歴史		ねぶた製作		参加する際の指導		囃子について		ねぶた本体について		ねぶた師について	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	6	66.7%	5	55.6%	3	33.3%	3	33.3%	2	22.2%	0	0.0%
大型	2	100.0%	1	50.0%	2	100.0%	1	50.0%	0	0.0%	0	0.0%
子ども	3	75.0%	2	50.0%	0	0.0%	2	50.0%	1	25.0%	0	0.0%
地域	1	33.3%	2	66.7%	1	33.3%	0	0.0%	1	33.3%	0	0.0%

表 18 講話の内容 (複数回答あり)

Ⅲ. 学校・地域との連携に対する意識について

(1) 地域の伝統の伝承

「学校教育で、ねぶたに関する内容を取り上げるこ

紙貼り、丸や四角をベースとした簡単な型のねぶた製作などである。

	ねぶた面		金魚ねぶた		灯籠ねぶた		ねぶた本体		その他	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	4	23.5%	13	76.5%	4	23.5%	13	76.5%	4	23.5%
大型	1	33.3%	2	66.7%	1	33.3%	1	33.3%	1	33.3%
子ども	1	14.3%	6	85.7%	2	28.6%	5	71.4%	2	28.6%
地域	2	28.6%	5	71.4%	1	14.3%	7	100.0%	1	14.3%

表 16 ねぶた制作における支援内容(複数回答あり)

④囃子の指導・支援内容

囃子の指導・支援が行えるとする団体は全体で 33 団体であり、「太鼓」「笛」「手振り鉦」の指導・支援を行える団体は、それぞれ 31 団体、全体に対する割合は 93.9 % である。33 団体中、ほぼすべての団体が「太鼓」「笛」「手振り鉦」3つの指導を行えるとしている。

	太鼓		笛		手振り鉦	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	31	93.9%	31	93.9%	31	93.9%
大型	13	100.0%	13	100.0%	13	100.0%
子ども	8	100.0%	7	87.5%	8	100.0%
地域	10	83.3%	11	91.7%	10	83.3%

表 17 囃子における支援内容(複数回答あり)

⑤講話の内容

講話を行えるとする団体は全体で 9 団体であり、講話の内容としては「ねぶた祭の起源・歴史について」が 6 団体(66.7 %)「ねぶた製作について」が 5 団体(55.6 %)「参加する際の指導」と「囃子について」が 3 団体(33.3 %)「ねぶた本体について」が 2 団体(22.2 %)であった。「ねぶた師について」の講話を行える団体はなかった。

とは、地域の伝統を継承するために意義あることと思いますか」の間には、全体として「大いにある」が 80.3 %、「少しはある」が 16.9 %、「わからない」が 0.0 %、「そうは思わない」が 1.4 % であり、学校教育においてねぶたに関する内容を取り上げることについて 97.2

%が肯定的であった。特に子どもねぶた団体が積極的に捉えている（「大いにある」が92.9%）ことが特徴的である。

	大いにある		少しはある		わからない		そうは思わない		無回答	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	57	80.3%	12	16.9%	0	0.0%	1	1.4%	1	1.4%
大型	13	76.5%	4	23.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
子ども	13	92.9%	1	7.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
地域	31	77.5%	7	17.5%	0	0.0%	1	2.5%	1	2.5%

表19 学校でねぶたに関する内容を取り上げる必要性

(2) 地域の活性化

「学校で、ねぶたを製作・制作し運行することは、地域の活性化に繋がると思いませんか」の問には、全体として「大いにある」が62.0%、「少しはある」が31.0%、「わからない」が1.4%、「そうは思わない」が4.2%であり、学校でのねぶたの活動が地域の活性化に繋がると肯定的に捉えている団体は、93.0%であった。しかし、「伝統の継承に意義あること」という(1)の質問の回答よりはやや消極的な回答になっており、特に大型ねぶたにその傾向がみられた。学校でねぶたを取り上げることに、地域の伝統の継承のためになるという意義に比べて、地域の活性化に繋がるという捉え方はやや低いと考えられる。

(3) 学校で取り上げる内容

「学校教育でねぶたについて取り上げるとしたら、どのような内容が必要だと思いますか」（必要だと思

	歴史・起源		制作		囃子		ねぶた絵		経済効果		ルール		その他	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	50	70.4%	43	60.6%	47	66.2%	8	11.3%	4	5.6%	34	47.9%	4	5.6%
大型	15	88.2%	4	23.5%	7	41.2%	1	5.9%	1	5.9%	13	76.5%	2	11.8%
子ども	10	71.4%	11	78.6%	11	78.6%	2	14.3%	1	7.1%	6	42.9%	1	7.1%
地域	25	62.5%	27	67.5%	29	72.5%	5	12.5%	2	5.0%	15	37.5%	1	2.5%

表21 取り上げる内容(複数回答あり)

(4) 学校と運行団体の連携について

「子どもたちがねぶた祭を継承していくために、学校とねぶたに関わる団体が連携し、相互に働きかけをすることが必要と思いませんか」の問に、「必要である」81.7%に対し、「特に必要でない」が12.7%であった。大型ねぶた運行団体では「必要である」が88.2%、「特に必要でない」が5.9%、子どもねぶた運行団体では、「必要である」が100.0%、地域ねぶた運行団体では、「必要である」が72.5%、「特に必要でない」が20.0%であり、学校と運行団体の連携については、大型ね

	大いにある		少しはある		わからない		そうは思わない		無回答	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	44	62.0%	22	31.0%	1	1.4%	3	4.2%	1	1.4%
大型	10	58.8%	5	29.4%	1	5.9%	1	5.9%	0	0.0%
子ども	9	64.3%	5	35.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
地域	25	62.5%	12	30.0%	0	0.0%	2	5.0%	1	2.5%

表20 学校でねぶたを製作・制作し運行することが地域の活性化になる可能性

う項目3つまで)の問には、第一に「歴史・起源」が70.4%、第二に「囃子」が66.2%、第三に「製作・制作」60.6%、第四に「ルール」47.9%、第五に「ねぶた絵」11.3%、第六に「経済効果」5.6%となっている。「その他」は5.6%であり、その内容は「ねぶた祭に参加しふれ合うこと」、「今後現在以上にねぶたを日本に認知してもらうために必要なことは何かを考え話し合うこと」「ねぶた祭を行う理由の学習」「ねぶた祭の大切さや重要性」「地域との関わりや誇りについての学習」である。大型ねぶた運行団体では「歴史・起源」と「ルール」を重視する傾向にあり、子どもねぶた運行団体、地域ねぶた運行団体では「囃子」「製作・制作」と「歴史・起源」を重視している。大型ねぶた運行団体の回答では「ルール」は76.5%と高い値になっているが、子どもねぶた運行団体では42.9%、地域ねぶた運行団体では37.5%と、必ずしも高いとは言えない回答結果となっている。

ぶた運行団体や子どもねぶた運行団体に対して、地域ねぶた運行団体がやや積極的でないことが読み取れる。

	必要である		とくに必要でない		その他		無回答	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	58	81.7%	9	12.7%	2	2.8%	2	2.8%
大型	15	88.2%	1	5.9%	0	0.0%	1	5.9%
子ども	14	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
地域	29	72.5%	8	20.0%	2	5.0%	1	2.5%

表22 学校と運行団体の連携の必要性

(5) ねぶた祭りのアルバイト

「ねぶた祭において、アルバイトを雇っていますか」の間には、「雇っている」33.8%、「雇っていない」62.0%であった。各運行団体を見ていくと、アルバイトを雇っている団体は大型ねぶたが88.2%、子どもねぶたが28.6%、地域ねぶたが12.5%であり、大型ねぶた運行団体では、多くの団体がアルバイトを雇っていることがわかる。子どもねぶた、地域ねぶたとだんだんと割合が下がっていくことも確認できる。アルバイトを雇っていないが、学生のボランティアの制度があるとの回答もあった。

	雇っている		雇っていない		その他		無回答	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	24	33.8%	44	62.0%	1	1.4%	2	2.8%
大型	15	88.2%	2	11.8%	0	0.0%	0	0.0%
子ども	4	28.6%	10	71.4%	0	0.0%	0	0.0%
地域	5	12.5%	32	80.0%	1	2.5%	2	5.0%

表23 アルバイトの有無

(6) 雇っている学生の所属

雇っている学生の所属では、「中学生」25.0%、「高校生」75.0%、「大学生」8.3%であり、ねぶた祭に関するアルバイトの多くは、高校生が担っているといえる。

	中学生		高校生		大学生		その他	
	団体数	%	団体数	%	団体数	%	団体数	%
全体	6	25.0%	18	75.0%	2	8.3%	1	4.2%
大型	2	13.3%	12	80.0%	2	13.3%	1	6.7%
子ども	2	50.0%	3	75.0%	0	0.0%	0	0.0%
地域	2	40.0%	3	60.0%	0	0.0%	0	0.0%

表24 アルバイトの学生の所属

IV. 自由記述欄ー

学校や関係者への要望・意見・私見

調査は最後に、学校や関係者への要望・意見、祭への私見を自由に記載してもらった。約1/3の団体が記載した内容から読み取れることは、①子どもの成長にとって地域の伝統文化について学び、参加することが大切と考える。②今後学校との関わりが大切であり、学校としても積極的に取り組んでほしい。③そのためには、学校とねぶた運行団体の話し合いが必要である。④大型ねぶたの観光化にともない、ねぶた祭の主役は何か、忘れられてきているのではないかと、であった。

4. 結論

調査結果の要点を整理し、関係団体への提言を述べ結論としたい。

子ども(18歳まで)の運行団体への参加状況は、囃子が一団体平均41名(大人数参加1団体除く)、ハネトが63名(大人数参加4団体除く)で、囃子もハネトも小学生をピークに学年が上がるに従い参加者数の減少がみられたが、ハネトの大型ねぶたの中・高生の参加者数のみ増加がみられた。また、大型ねぶたの囃子に参加する子どもの平均数(37人)は、囃子全体の平均(41人)より少なかったが、ハネト参加者数(87人)は全体の平均数(63人)より多く、囃子よりも50名多かった。ハネト編成の主流は、幼稚園・小学生で、団体数比率で全子どもの75.0%を占め、高校生の全子ども団体数比率は、たった3.9%であった。大型ねぶたに限定すれば、高校生は10.0%になるが、相対的に少ないことには変わりはない。

近年各団体に参加する子どもの増減は、囃子で「大きな変化はない」39.4%、「増えつつある」33.8%、「減少しつつある」16.9%で、増減の差し引きをすれば約2割の団体が増えている傾向にあるといえる。そして、子どもねぶたの増加理由が、「団体の働きかけ」(50.0%)や「団体活動の活発化」(37.5%)の努力の結果、「興味・関心を持つ生徒が増えた」(100%)と捉えていることに、注視すべきである。一方、ハネトはそれぞれ、50.7%、5.6%、29.6%で、「大きな変化はない」といえるが、差し引き約1/4の団体が減少しており、総体として子どもの参加数が減少傾向にあることは重大である。また、大型ねぶたに関しては「賞取りのため子どもの参加に制限をかけている」団体もあり、これらの傾向は、「2009年調査」の「若者＝高校生ハネト離れ」の要因になっていると思われる。

次にねぶたと学校との関わりについて整理する。現在、学校での指導・支援を行っている団体は、全体で32.4%、大型ねぶた52.9%、子どもねぶた50.0%で半数を超える団体に関わり、一方地域ねぶたは17.5%と少なかった。学校に指導・支援できる内容は、全体で囃子が79.6%、ねぶた製作26.1%、講話8.7%であった。囃子の指導・支援は、大型ねぶたで77.8%の団体が行っており、地域ねぶたでも85.7%の団体が指導・支援をしており、練習の必要な囃子の担い手の養成のために努力しているのではないかとと思われる。

「学校から要望があった際に対応できる」と回答した大型ねぶたは82.4%、子どもねぶた78.6%、地域ね

ぶた42.5%、全体で59.2%であり、現在指導・支援している団体の3割増しとなる。指導・支援の内容は、囃子が78.6%で最も多く、次にねぶた製作40.5%、講話が21.4%であった。

また、ねぶた運行団体が学校でねぶたを取り上げることにする意識は、「伝統を継承するために意義あることと思う」が97.2%で、その高い肯定感は自由記述にもみられ、学校教育でねぶたを取り上げることは伝統の継承という点において、高い期待がもたれていた。また、「地域の活性化に繋がると思う」も93.0%であった。また、「運行団体と学校が協力し、相互に働きかけることが必要だと思う」は全体で82.4%、「必要でない」は12.7%で、その中で子どもねぶたが100.0%、地域ねぶたが72.5%と連携での意識の差がみられた。

「学校教育で取り上げるとしたら、どのような内容が必要か」は、「歴史・起源」が70.4%、「囃子」66.2%、「製作・制作」60.6%、「ルール」47.9%で、大型ねぶたは「歴史・起源」(88%)と「ルール」(77%)を重視する傾向にあり、子どもねぶた、地域ねぶたは「囃子」(79%,73%)「製作・制作」(79%,68%)と「歴史・起源」(71%,63%)を重視している。大型ねぶたが「ルール」の指導を学校に求めている理由は、カラスハネト問題等が念頭にありと推測される。

最後に、調査結果を概括すれば、ねぶたに参加する子どもの人数の特徴は、囃子が増える傾向を示し、ハネトが3割の団体で減少していることといえる。また、現在、学校と連携しながら、子どもたちに指導・支援を行っている団体は32%で、今後学校からの指導・支援要望に新たに対応できる団体が3割あった。さらに、学校教育でねぶたを取り上げることの意義や、地域の活性化への寄与を感じている団体は9割を超え、連携の必要性を感じる団体も8割を超えていた。

昨年度の「ねぶた・ねぶたの子ども意識調査、子どもの祭への思い(意識)調査、ねぶた・ねぶたと学校との関わり調査」²⁾では、5割弱の小・中学校が何らかの内容でねぶたを取り入れ、5割強の子どもが「学校でねぶたを取り入れるべき」と考えている事実から、「学校は地域文化の拠点としてねぶたを位置づけ、より多くの学校がねぶたを教育内容として、教材として取り上げ『地域ねぶた』の復興を図ることが必要かつ可能と思われ、このことが大型ねぶたの祭りの担い手の裾野を拓けることになる」と述べた。また、「2009年若者=高校生調査」³⁾では、若者=高校生のハネト

離れを実証し、全市で5割の町内しか実施されていない地域ねぶたの復興と、若者が参加しやすい環境を整備する必要性を述べた。それらを踏まえ僭越ながら、2点提言をする⁴⁾。

1. 大型ねぶたにおける囃子の子どもの参加数は相対的に多くなく、ハネトでは「賞取りを目指し子どもの参加を制限をしている」団体もあった。ハネト若者離れ現象を合わせて考えるならば、「見せる祭り」から「市民が参加する祭り」への転換、すなわち祭りの原点に戻って再考し、この中に地域ねぶたを全市的にどのように復興させるかを見通す必要がある。その点、「青森ねぶた保存伝承条例」を制定した行政と関係者の責任での進展を期待したい。

2. 今回の調査は、学校と運行団体の連携の必要性を運行団体側より明確にさせた。そのためには、学校教育サイドの意見や要望を集約する役割を担う存在と、同様に、ねぶた運行団体サイドの意見や要望を集約する役割を担う存在が必要となってくる。また、その際、学校教育サイドには、地域の文化財の教育への活用を推進させていく姿勢や、それを援助する制度が必要である。それと同時に、ねぶた運行団体サイドには、子どもたちに指導・支援する学習内容の整理や、指導・支援のクオリティを維持するための取り決めなどが求められる。そのためにも、学校、行政と運行団体による検討の場の設置が必要である。市レベルの検討会とともに、地区、学校レベルでの検討の場を設ける。例えば、文科省が予算化し、青森市の社会教育課で進めている「学校支援地域推進本部」での位置づけなどが考えられる。

地域の伝統文化=ねぶたを通して、津軽の子どもたちの人格形成が図られ、また、そのことがねぶたの普及・発展に繋がるとを心より願うものである。

お忙しい中、本調査にご協力頂いた運行団体の皆様に心から感謝申し上げます。また、調査にあたり、多くのご協力を頂きました青森観光コンベンション協会の皆様へも感謝の意を表します。

註

1) 本調査は、弘前大学教育学部「ねぶた・ねぶたと学校教育研究」プロジェクトによるものであるが、執筆は、主に調査を担当した、立田、大谷、大野の3名

の責任で行った。また、調査結果は、「青森ねぶた運行団体と子ども・学校との関わり調査報告書」、2009年7月9日発表を踏まえ執筆したものである。

2) 弘前大学教育学部「ねぶた・ねふたと学校教育研究」プロジェクトによる、「ねぶた・ねふたの子ども意識調査、子どもの祭への思い(意識)調査、ねぶた・ねふたと学校との関わり調査報告書」、2008.7.10。

3) 立田健太・佐藤紘昭・大谷良光:「青森ねぶた祭への高校生の観覧・参加状況と祭への意識(思い)調

査～ハネト若者離れ問題を焦点として～」『弘前大学教育学部研究紀要』102号、pp . 2009年10月。

4) 「提言」は、青森市市長鹿内博様、青森ねぶた祭実行委員会実行委員長蝦名文昭様、青森市教育委員会教育長月永良彦様に対し、2009年7月9日に行った。市長は代理の経済部長が、教育長は代理の教育部長が、実行委員長は代理の理事長が対応された。この様子と内容は、テレビ2社、新聞5社が報道した。

*ねぶた師弟子

The apprentice of the Nebuta master

*弘前大学教育学部技術教育講座

Department of Technology Education, Faculty of Education, Hirosaki University

***弘前大学教育学部学生

A Undergraduate Student of Faculty of Education, Hirosaki University